

カルガリー大学訪問での活動報告 A Report on the Visit to the University of Calgary

樋口貴俊

Takatoshi Higuchi

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

Graduate School of Sport Sciences, Waseda University

スポーツ科学研究, 8, 288-289, 2011年, 受付日:2011年10月4日, 受理日:2011年10月4日

1. はじめに

早稲田大学グローバル COE プログラムが箇所間協定を結ぶカナダのカルガリー大学キネシオロジー学部へ研究及び教育の現状調査を目的として現地を訪問した。早稲田大学スポーツ科学学術院教授の川上泰雄先生及び研究院助教の宮本直和先生の引率 2 名とグローバル COE プログラム登録学生 7 名で 2011 年 9 月 7 日(水)から 2011 年 9 月 9 日(金)の 3 日間で同大学キネシオロジー学部研究施設の見学、カナダ・オリンピック・パークの見学、ライフ・アンド・スポーツ・サイエンス・シンポジウムでの研究発表などを行った。

2. キネシオロジー学部研究施設の見学

9 月 7 日午前中に予定されていた研究施設の見学ツアーは、派遣メンバーの往路の飛行機の遅延のため、7 日午後と 8 日午前に急きょ変更になったにも関わらず、各研究室の担当者の柔軟な対応によりスポーツ医科学領域の多くの研究施設を見学することができた(写真 1)。

バイオメカニクス領域の実験室には優れた分解能を持つ紫外線顕微鏡や三次元情報の再構築ができるレーザー顕微鏡などの最先端の測定装置があった。また、筆者が専攻している神経科学領域の研究室もあり、経頭蓋磁気刺激装置、脳波測定装置、視界遮蔽メガネ、把握力測定装置などといった神経科学・心理学の実験を行う設備も整っていた。同研究室の紹介をしていただいた Dr. Johnston 助教のお話では、眼球運動測定装置を用いた実験も行われており、共同研究や

ポスドク留学の対象としての魅力を強く感じた。

それぞれの研究室のクオリティの高さもさることながら、発熱や騒音を起こす装置を空調と防音強化された個室に隔離し、撮影装置を振動の小さい地上階に設置するなどの研究室の垣根を越えた工夫もなされていた。さらに、休憩ラウンジ、フィットネス施設、飲食店、購買部などがキネシオロジー学部と同じ建物の中であり、研究活動をアシストするための環境が整っているように感じた。

3. 研究活動

修士及び博士課程の学生は統計学と研究方法論の履修が必須である以外は指導教員の指示の下、研究活動と学位論文作成に取り組むことが求められていた。また、今回の訪問で交流のあった大学院生の中には学内のスポーツの授業やバイオメカニクスの実験の授業を教えている方もおり、研究活動だけでなく、教育経験を積むためのシステムも用意されていた。ポスドク研究者も多数おり、中にはカナダ政府が提供する外国人向けのフェローシップを利用している方もいた。

4. カナダ・オリンピック・パーク

1988 年に開かれたカルガリーオリンピックのスキージャンプ、ボブスレー、リュージュの競技会場であったカナダ・オリンピック・パークは冬季のみならず、夏季もマウンテンバイク競技や子供たちの野外活動の施設として運営されていた。さらに敷地内にはナショナル・スポーツ・スクールと呼ばれる、冬季オリンピック競技種目やテニス、水泳、体

操競技など合計 23 種目のトップ選手の育成を行う学校があった。印象深かったのは、遠征やトレーニングで多忙を極める生徒たちの学力が低下しないよう、優秀な教員を集め、学生アスリートに適したカリキュラムで学校教育を実施している点や、生徒の家族がカルガリーに移住できるように住宅を用意している点である。さらに、アスリートとしての将来性を広げるために複数の競技を経験させる方針をとっており、長期的且つ幅広い視野でのアスリート育成に日本とは異次元のレベルで取り組んでいることに衝撃を受けた。

5. シンポジウムでの研究発表

カルガリー訪問 2 日目にカルガリー大学キネシオロジー学部ヒューマン・パフォーマンス・ラボ主催のライフ・アンド・スポーツ・サイエンス・シンポジウムが開催され、早稲田大学の学生 7 名とカルガリー大学の学生、ポスドク研究者、研究助手 13 名がポスターを掲示し、約 2 時間のフリーディスカッションを行った。当初予定されていた 5 分程度のフラッシュプレゼンテーションは行われなかったが、その分、質疑応答に十分な時間を使うことができた。自身の研究に対する様々な質問や意見を受け、これからの研究活動に役立つ情報を得ることができた。現地学生の研究発表はどれも素晴らしく、実験方法や研究成果だけでなく、質問

や意見に対する受け答えの仕方などもとても参考になった。発表内容は主に筋骨格系の基礎的研究が多かったが、クロスカントリースキー滑走中の代謝、スマートフォンを用いた運動量のモニタリング、軟骨細胞の酸素飽和度のシミュレーションなどの研究もあった。

6. 終わりに

今回の施設見学やシンポジウムを通して、自身が米国留学で身に着けた英語力が帰国後に大きく低下していることを感じ、日本で英語力を維持することの難しさを知った。しかし、現地の人たちとの交流において英語で困ったことはほとんどなく、むしろ、幅広い学術的知識を身に着けていく事の方が学術交流を深める上での私にとっての課題であることがわかった。

末尾になりましたが、この交流事業をご支援下さいました早稲田大学グローバル COE プログラムリーダーの彼末一之先生、教育推進部門長の中村好男先生、学術交流コーディネーターの川上泰雄先生及び宮本直和先生をはじめ、今回の学術交流プログラム実施に向けご尽力下さいました早稲田大学スポーツ科学学術院の先生方、お世話になったカルガリー大学キネシオロジー学部の先生と学生の皆様に深く心からお礼申し上げます。ありがとうございました。



写真 1. 研究室見学の様子

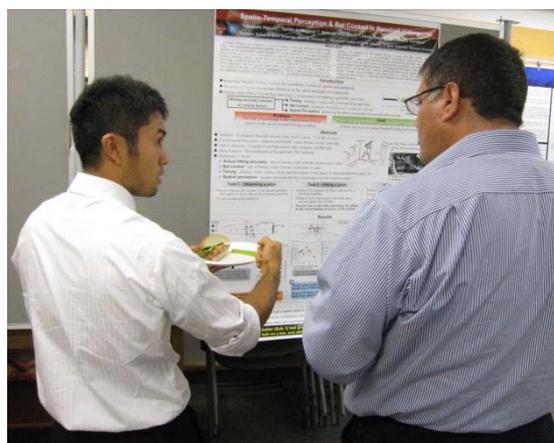


写真 2. ライフ・アンド・スポーツ・サイエンス・シンポジウムの様子